



志摩市阿児町甲賀の妙音寺裏にある「地震津浪遺戒」の碑の遠景(写真右)と、碑の内容を説明する看板(写真左)。

地震津浪遺戒

蓋我甲賀村ハ其土地低キヲ以テ古ヨリ地震津浪ノ災ニ罹ルノ數ニ殊ニ明應宝永享保安永等ノ如キ頗激烈ニ村里人九分ハ殆流失ニ歸シタリ故漸丘地ニ居ヲ移セシナリトノ記録口碑存スルモ其六普詣視セシガ安政元年六月十四日ノ夜大地震起リシカハ衆皆驚怖セシカモ幸ニ災變ニ至ラズ然ルニ同年十一月四日朝再大地震起リ是レ未曾有ノ激震ヲ家屋倒レ大道裂ケシカハ人畜散亂奔逸シテ數島ニ避逃ス斯ル間ニ井水モ一時涸竭シ海潮ハ遙沖カキテ退干セシガ直ニ交シ數十丈ノ高浪恰雲ノ如ク起リ忽激進シテ陸地ヲ突ク一四田野邸宅モ一時潰レ殆野羅トナリタリ而シテ其流失ニ屬セシハ實ニ戸數百四十二家屋四百一十一船舩五十一堤防四ニメ刺ヘ溺死セシモノ總十一人其他什貨財糧米等一モ殘留スルモノナシ是ニ於テ衆山野ニ起臥シ飢寒ニ困ム等其慘狀實ニ言ハシ方ナシ依リテ藩主ヨリ米百八十三俵金五十六兩衣類數領ヲ賑恤セラレタリ再後數十年間夙夜回復ニ孜々タリシカハ漸ク今日ノ形勢トナレリ嗟呼天災實ニ測ルベカラズ後世ノ人若地震際ニ必先火ヲ戒メ速ニ老幼ヲ携ヘ高丘ニ避クニ否ラサレバ危難必其身ニ至ルヲアヒシ其宜之ヲ鑑ム也

千時明治廿四年十一月建之

志摩市阿児町甲賀の妙音寺裏にある「地震津浪遺戒」の拡大写真。1854年安政東海地震の際に、この地を襲った津波や被害の様相が記されている。

戸數百四十一家屋敷百十一艘船五十一堤防四十二
剝ハ的処セシモノ縱十一人其他貨財糧米等一モ殘
留スルモノナシ是ニ於テ衆山野ニ起卧シ飢寒ニ困等
其慘ク大言ニ言ハシ方ナシ依リテ皆主ヨリ米百八十三
俵金五十六兩交類數領ヲ賑恤セラレリ再後數十
年間風夜四復ニ被々ナリシカハ漸々今日ノ形勢トナリ
嗟呼天災實ニ測ルベカラズ後世人若地震ニ際セバ
先火ヲ戒メ速ニ老幼ヲ携テ高丘ニ避クベシ否ラサルハ
危難ニ其身ニ及ルベシ其宜之ヲ鑑ミキ也
干時明治廿四年十月建之

志摩市阿児町甲賀の妙音寺裏にある「地震津浪遺戒」の碑文の拡大写真。
「嗟呼 天災實ニ測ルベカラズ」以下の部分には、後世に遺そうとした津波教訓が記されている。

地震津波遺戒の碑

安政元年十一月四日（現暦一八五四年十二月二十三日）朝大地震が発生し、津波により当時の甲賀村が壊滅状態となりました。

この大地震、津波の惨状を後世に伝えるために先人が地震、津波の遺戒としてこの石碑を明治二十四年（一八九一年）十一月に建立されました。

大地震で当時の人々は、逃げまどい井戸水も枯れて海潮は、はるか沖まで退き十数メートルの高波が計四回も押し寄せて家屋、田畑は、一瞬の間に流失しました。流失した家屋は、実に百四十一戸、建物四百十一、船舶

五十一、堤防の決壊四ヶ所、溺死十一人の大被害でした。その他、貨財、食料など一つも残ることなく、当時の甲賀村の人々の生活は、山野に寝起

さし、飢えと寒さに苦しみ言葉に言い現せないような状態でした。

「地震が発生したら、必ず火を消して速やかに老人、子供を携え高い所に避難するように」とこの石碑に教訓として書いてあります。

この石碑をさらに後世に伝え、地区の人々に理解していただくためにもここに石碑の説明看板を設置します。

平成二十四年十二月

甲賀自治会